

戦時中のアメリカにおける対日戦略と日本研究： ミシガン大学ロバート・ホールを中心に

中 生 勝 美

キーワード：『菊と刀』、クラックホーン、ロバート・ホール、戦略情報局（OSS）、
ディキシー・ミッション、野坂参三

はじめに

最近、筆者は日本の人類学史をまとめて、『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』を刊行した（中生 2016a）。研究対象を戦前に絞って歴史研究を始めたが、戦後GHQに設置された調査部門に、アメリカの人類学者が日本人の人類学や民俗学を専攻していたアシスタントを採用して社会調査をおこなった資料を見つけた。これは、戦前と戦後の人類学史を連続的に考えるうえで興味深い事実である。さらに戦後のアメリカによる日本調査は、戦時中の対日戦略のための日本研究にルーツがあり、その政治的な意味に関心を持った。筆者はすでにアメリカの日本研究について、GHQの調査、およびミシガン大学の日本研究を発表している（中生 2006、2007、2014、2016b）。特に後者の論文でロバート・ホールの戦時中の経歴が不明だったので、本稿は、この課題をミシガン大学で調査した点に重点を置いて述べていきたい¹。

1 第二次世界大戦中の日本研究

アメリカの対日戦略で最も有名なのはベネディクトで、戦後出版された『菊と刀』は、1945年初めに執筆された「日本人の行動パターン」を基礎にしている（ベネディクト 1997）。これはベネディクトが戦時情報局（Office of War Information=OWI）に提出した天皇制の処遇に関する報告書である。OWIには、他にゴラー、ミード、ベイトソンなどの人類学者も勤務していた。ベネディクトは、当初ヨーロッパ、次いで日本が占領した東南アジアの国民性を研究した後、日本軍に対する心理作戦に従事していた。OWIで人類学者に期待されたのは、日本軍に厭戦気分をもたらす、投降を呼びかけるための宣伝ビラを作成であった。ベイトソンは、火葬にした日本兵の灰を箱につめて、宣伝の言葉を同封し、日本の上空からパラシュートで降下させ、日本人の戦意をくじこうとするアイデアを実行しようとしていた（ベイトソン 1993：80-81）。ミードは自らフィールドワークをした

ニューギニアの経験から、現地での食料調達などの情報を提供していた。

クラックホーンは対日本戦略に対して天皇制を間接利用するように提言し、このことは『人間のための鏡』にも言及されている（クラックホーン 1971:201-202）。その元になったのは Office of Strategic Service=OSS 資料で、天皇制に関する1944年9月のレポートがある²。同じ時期に提出されたレイトンの報告書もあった。クラックホーンは、ナバホ族の研究者として知られていて、さらに理論家としても有名で、アメリカの文化史学派のみならず、ウィーン大学にも留学してウィーン学派にも通暁しており、アメリカの人類学会では重要な人物だった。

レイトンは、クラックホーンと同じナバホ族を研究対象にしており、妻とナバホ族の民族誌を書いている（Leighton and Leighton 1945）。レイトンの妻は、クラックホーンとナバホ族の民族誌を共著で書いている（Kluckhohn and Leighton 1974）。レイトンは、アリゾナ州にあるナバホ族居留地に隣接するポストンへ日系人収容所を誘致した。そこで、若い日系人をあつめて人類学と心理学の観点からフィールドワークをおこない、そのデータをワシントン D.C. へ送っていた³。

レイトンは人類学と社会心理学を専攻しており、ポストン収容所の日系人の日常生活を調査して OWI に送っていた。ベネディクトが『菊と刀』の中で言及している日系人の資料は、レイトングループの調査データであると考えられる。レイトンは、この調査の成果を上げたことと、ナバホ研究で交流のあったクラックホーンが OWI の要職にあったことから、日系人のアシスタント 5 人をつれてワシントン D.C. の OWI に移籍した。ちなみにレイトンは、終戦後ただちにアメリカ軍の戦略爆撃が日本にいかなる効果をもたらしたかという観点で、社会学者を中心に調査団を組織し、日本各地を回った。この調査団は、戦後初めて広島・長崎の原爆跡地に入り、カラーフィルムで映像を撮るなどの活動が知られている。レイトンは、広島原爆投下があまりに大きな被害を与えていることに衝撃を受け、“That day in Hiroshima” という短い報告書で原爆投下を批判する文章を1946年末に発表している（Leighton 1946）。以上は、クラックホーンを中心として、対日戦略にかかわった人類学者の活動である。

筆者は、かねてから対日戦略と天皇の間接利用というアイデアが研究者からの発案なのか疑問に思っていた。ワシントン D.C. の戦時情報局でハーバート大学のフェアバンクは、この発案が OWI の組織的指令のもとに行われていたと指摘している。彼は、OWI 長官の代理補佐に 3 人の地域代表がいて、極東担当の長官代理補佐はジョージ・E・テラーで、彼の指導的発想の一つが、日本と戦うために社会人類学者と心理学者を動員して、日本の戦争動機を理解し、説明することが不可欠と考えていたと述べている。だから彼はクラックホーンとレイトンを採用したのであり、その路線に従ってベネディクトの『菊と刀』も書かれたのだと言う（フェアバンク 1994:395-396）。

このクラックホーンの人脈とは全く異なるところで、日本研究をしていたのが、ミシガン大学のロバート・ホールである。ホールは、戦前に 6 回訪日しており、人文地理学者と

して佐渡、奈良盆地の経済地理、東海道五十三次を踏破して報告書を書いている。さらに柳田国男とも親交があり、柳田が主催した『島』という雑誌には、ホールの訪日動向を紹介したり、彼の論文の「佐渡」を翻訳して掲載したりしている。ホールの日本研究について、筆者はすでに発表している（中生 2014）。その論文で、彼の足跡が1938年から45年までアカデミズムから消えており、その時期に何をしていたのか、課題として残った。彼は1946年から地域研究学会の会長としてアカデミズムの世界に復帰し、1947年という早い時期に日本研究センターをミシガン大学に創設するなど、彼の政治的手腕が強力になったことも、戦時中の経歴に関係が深いのではないかと推測した。

ロバート・ホールの略歴は、ミシガン大学のHPにも掲載されているが⁴、ミシガン大学のベントリー図書館に保存されたホールの履歴情報が、戦時中の職歴を詳しく記載しているので、両方の情報を補完してまとめていく⁵。

ロバート・ホールは、1896年7月18日にニューメキシコのエスパニョーラで生まれ、東デンバー高校を1920年に卒業し、第一次世界大戦が終わった後、ミシガン大学に入学し、1923年に学部を卒業し、1924年に修士号、1927年に博士号を取得した。1924年と25年にハイチ（Haiti）、1928、29、31、33、36年に日本へ渡航し、1935年に地理学の助教授、1938年に正教授となり、1937年と38年に極東研究所（the Institute of Far Eastern Studies）の所長に就任した。1928年から29年に科学調査委員会から奨学金を受け、また1931年から35年まで日本でフィールドワークのための奨学金を受けた。

1941年にラテンアメリカで日系人の進出について調査し、1942年から43年にかけて、彼は戦略情報室（Office of Strategic Service=OSS）の太平洋沿岸室の室長（director of the Pacific Coast offices for the Office of Strategic Services）となった。そしてワシントンD.C.に転勤し、インドと中国へ行き、1943年に極東の米英情報連絡のためにイギリスへ赴任した。その後、北アフリカ、インドのアッサム地方を経由して、中国・ビルマ・インド地域の調査分析部門の将校兼主任となり、南東アジアの統括、そして最終的に中国 OSS 総局の局長（commanding officer of OSS in China）となった。

彼は、アメリカ地理学科、アジア研究、日本のアジア研究会の会員で、1948年以来、14年間社会科学調査委員会の会長で、1951年から52年まではアジア研究学会の会長だった。アジア財団とアジア学会の顧問も歴任した。

ロバート・ホールは、戦前のアメリカに珍しく、日本に実際渡航して、社会科学のフィールドワークをおこなった人文地理学者であり、民俗学・人類学にも関係が深い研究者が、どうして OSS の中国の総責任者になったのであろうか。次にこの点を分析する。

3 中国のホール

まず、アメリカの情報機関について概説しておきたい。アメリカでは第二次世界大戦までまとまった情報機関がなく、外交をつかさどる国務省、財務省や商務省も独自の情報活

動を行い、軍隊も陸軍省軍事情報部（MIS）、海軍情報部（ONI）、国内は連邦捜査局（FBI）などと拡散していた。アメリカで国家安全保障（National Security）という言葉が誕生したのは、1941年7月の大統領令で情報調整局（Office of Coordinator of Information = COI）が発足した時で、イギリスの情報機関（MI6）の援助で設立したCOIは、辣腕弁護士のウイリアム・ドノヴァンと、その周辺の一部の人間で創設された（加藤 2005：48-49）。

機構としては、対外情報部（FIS）と調査分析部（Research and Analysis Branch, R&A）が中心で、調査分析部の責任者はウイリアムズ大学学長ジェームズ・P・バクスター3世で、そのもとでハーバード大学歴史学部長ウイリアム・L・ランガーが、エリート大学から英才を集めた。1941年12月7日の日本軍による真珠湾攻撃で国家規模の統一的情報活動が必要であることを、ルーズベルト大統領は痛感し、1942年6月、統合参謀本部の決定で戦略情報局（OSS）に改組され、対外情報部のホワイト・プロパガンダ（公然宣伝）部門は、大統領直属の戦時情報局（OWI）として独立した（加藤 2005：51-52）。

ハリス・スミスは、OSSに関する著作でロバート・ホールに一回だけ言及している。ホールは昆明に滞在しR&A/Far Eastの責任者になっていたが、特に1944年夏にアメリカ情報部の視察団が延安に行ったディキシシー・ミッション（Daxie Mission）で提案された満洲・朝鮮・日本本土に派遣されるアメリカのスパイ工作に関与し、その時、サンフランシスコで採用した左翼の日系アメリカ人を使っていたと述べている（Smith 1972：263）。

このディキシシー・ミッションの資料は、山本利夫がアメリカ公文書館で収集した派遣団の報告書をまとめて翻訳出版しているので、その解説から当時の時代背景と派遣の意図を要約しよう（山本編 2006：1-6）。このミッションは、1944年7月にアメリカ軍が中国共産党の拠点である延安に視察団を送ったことを指している。米軍は援蒋ルートを通じて中国国民政府軍を支援していたが、中国戦線の日本軍は主要地域を支配しており、アメリカ空軍基地を破壊するため、この時期、華北から華南まで途切れなく支配する打通作戦を展開し、桂林など華南での攻防が激化し、アメリカ軍の拠点がある雲南省昆明、四川省の重慶なども緊張していた。延安を中心に、華北一帯では八路軍が遊撃戦を通じて日本軍と対峙していた。アメリカ軍のスティルウェル将軍や大使館若手キャリアは国共合作を再現し、共同で日本軍と戦うべきという意見が支持を集めていた。八路軍の規律やモラルが高いことは、延安を訪れたアメリカ系ジャーナリストから伝えられており、1944年6月にウォーレス副大統領が重慶を訪問して、蒋介石を説得し、八路軍と共闘の方向へ動いた。南北戦争の時に、ルイジアナなど南部諸州をディキシシーと呼んだので、このミッションのコードネームとなった。

このミッションの目的は、中国共産党を通じて、日本軍のあらゆる諜報を入手する以外に、中国共産党の戦力、指導者の情報を幅広く収集することであった。そして戦争遂行のため中共軍が将来いかに貢献するかを評価し、またアメリカの弱点である華北の日本の情報収集が主要任務であった。派遣されたのは、暗号通信、気象観測、諜報、サボタージュの専門家で、日本軍支配地域に墜落して、華北で生存しているアメリカ軍パイロットの救

出も大きな目的であったので、陸軍航空隊や歩兵の専門家も参加した。このミッションは第一陣が7月22日に延安に到着し、その後、アメリカ軍と中共軍の関係が険悪化する1944年末まで断続的に派遣専門家を増員したが、人数を減らして終戦まで絶えることなく滞在した。

八路軍は日本人の捕虜の扱いが巧みで、捕虜数が多いだけでなく、彼らを教育し、逆に日本軍に対する宣伝工作に利用していた。特に、日本共産党の野坂参三が日本人捕虜を教育し、日本労農学校や日本人民解放連盟を指導しており、ディキシー・ミッションの要員は、彼らと接触してアメリカ側で作成したビラ・新聞・ラジオ宣伝内容へのコメントを野坂参三(当時の偽名は岡野進)に求めた。OSSの中心メンバーであるクロムリー少佐は、在日経験のあるジャーナリスト出身で、日本軍情報の収集、分析で能力が認められていたが、ミッション情報をバレット団長の許可を得ずワシントン陸軍本部に送っており、そのなかに岡野から提案された日本への工作員派遣も、その電報をバレットに無断で重慶のOSSへ送っていた。ロバート・ホールは、この工作にかかわっているのも、その部分を詳しく述べよう。

野坂参三は、延安に到着したOSS将校のコリングとスティールに、1944年8月22日、満洲、朝鮮、日本への工作員派遣を申し入れた。団長を通じて「原文暗号即時破棄、コピー禁止」と付言した秘密電報を重慶に送った。このプロジェクトはアップルというコードネームが付けられた。その時の秘密電報を受け取ったのが、重慶OSSに勤務していたロバート・ホールであった⁶。このアップル・プロジェクトは、終戦まで継続的に議論され、当初重慶OSSでは、潜入に必要な資金を40万ドルと試算し、巨額であるが、良いギャンブルだと評価している(山本 2002:238)。

山本利夫は、1945年7月の資料に、野坂とOSSの話し合いが具体化しているとして、次のように資料をまとめている。工作員の潜入は、共産党の地下組織との接触を通じて諜報システムが展開し、初期には共産党グループが潜行している特定の地域、工場、施設のみを対象とし、活動は空襲による混乱と、疎開による支配機構の弱体化を利用して展開すべきで、華北から日本への工作員派遣は危険を伴うが、共産党は健在であるため、この工作は危険を冒しても決行すべき段階に来ていると結んでいる(山本 2002:239)。

余茂春(Yu Maochun)の*OSS in China*では、アップル・プロジェクトの提案をさらに具体的に紹介している。1944年8月22日に、野坂参三からコリングとスティールに提案した内容は、日本の領土内である満洲・朝鮮、さらに日本本土に、野坂が指導している日本人捕虜を工作員として潜入させるという提案である。この提案に、野坂はアメリカ側に華北で流通している日本の貨幣40万円を要求した(余 1999:292-293)。延安からホールのみ宛てられた電報が打電され、彼はその要求をワシントンD.C.の戦争省に伝えるための電報を書いている⁷。

余茂春は、この作戦の前提として、共産党がOSSから現金を得ようとしたことを指摘している。その現金は、日本敗戦時に、汪精衛政権の親日傀儡軍部隊が保持する日本軍の武

器を八路軍に渡すための賄賂に使うためだった。当時、中国共産党は、日本が遅からず敗戦することを予測し、国民党軍と対峙するため、日本軍の武器を必要としていた（余 1999：291-292）。この路線からアップル・プロジェクトが提案された。

前述したスミスの言及している、ホールが使用した左翼の日系アメリカ人とは、コージ（幸治）・有吉（Koji Ariyoshi）である。彼はディキシー・ミッションで延安レポートを数多く執筆した重要な人物である。1972年に有吉は東京YMCAで講演して、その記録が残っている。また、有吉の没後、彼の記念文集も出ている。これらの資料によると、有吉は日系二世で、1914年にハワイのコナでサトウキビ、コーヒー栽培をする一世の両親のもとに生まれ、1937年に港湾労働者を経てジョージア大学でジャーナリズムを専攻して卒業し、サンフランシスコとハワイで港湾労働者として働き、労働組合の活動をしていた⁸。太平洋戦争がはじまると日系人収容所に収容されたが⁹、志願してミネソタの情報機関で心理作戦要員として訓練を受けた後、戦争末期の2年間インド・ビルマ・中国戦線に送られ、重慶で心理作戦に従事した。有吉が重慶にいた時は、ベトナムと中国沿岸の日本軍に対する宣伝パンフレットを作成していたが、1944年10月から心理作戦要員として延安に派遣され、断続的に18、9ヵ月滞在した（Deane 1978：4-6、菊池 2003：459-461）。

有吉は、長く延安に滞在し、積極的に野坂や日本人捕虜と会見し、その印象記やアンケートなどをレポートにまとめている。彼はもともと共産党のシンパであったので、日本人や中国人の共産党員の考えを理解できた（山本 2006：12-13）。滞米経験もある野坂は、流暢な英語を話せたが、有吉とは日本語で会話をしていたので、さらに多くの情報を引き出せていた。

有吉とともにディキシー・ミッションに参加したジェームズ・小田は、日本軍の「戦闘序列」を作成する任務が与えられていた。有吉は、彼よりも1ヵ月遅れてビルマ方面から延安に派遣されてきたと述懐している。さらに小田は、有吉が野坂参三と協力して対日宣伝工作を発展させ、かつ重慶へ行ってハーレー大使を説得する任務を与えられた（ジェームズ・小田 1995：170-171）。

有吉は、この事情を講演で次のように述べている。重慶に派遣されたスティルウェル大使は、アメリカが国民党と共産党は統一して日本と戦うことを望んでいることを蒋介石に伝えたが、逆に蒋介石の圧力で辞任に追い込まれ、後任としてハーレーが赴任した。アメリカは蒋介石に武器を援助していて、中共側には武器を与えない指示に基づいた政策をとったので、アメリカ側と中共の「蜜月の熱」も冷めていき、1945年7月には内戦が始まった。有吉は重慶に駐在しているアメリカ軍中国総司令官のウェデマイヤー将軍に、八路軍が兵隊だけでなく民衆からの支持があるので、たとえアメリカの武器で武装した国民党軍でも、内戦になると中共軍の方が勝つであろうと報告した。有吉はそのことをハーレー大使にも伝え、アメリカが蒋介石支持を続けると内戦になり、しかも敗北するだろうと踏み込んだ意見を伝えた（菊池 2003：463-470）。その後、有吉の見立て通りに内戦となり、新中国の誕生となるのだが、有吉はアメリカ軍の司令官から、野坂を知っているこ

とと、心理作戦の経験から、日本で探知工作の仕事をしてはどうかと誘われたが、断ってアメリカ大使館文化情報部の文官をしていて、内戦になるのでアメリカに帰国した。その後、マッカーシズムの嵐で逮捕され、4年間裁判を続けたという（菊池 2003：471-472）。

4 ホールの日本分析

ロバート・ホールは、戦時中の活動に関して、自らまったく記録を残していない。そこで当時の時代的流れと中国 OSS 総局の活動から、ホールの役割を推測するしかできない。

有吉の経歴から、ホールとの接点が重慶であったと考えられる。しかし、上述のアップル・プロジェクトは、機密のレベルから有吉は知りうる立場ではないためなのか、彼の講演では全く言及されていない。有吉自身、延安でのレポートでは政治的なことを報告せず、生活状態などを報告したと述べている。

延安レポートは、ワシントンを始め、昆明、ニューデリー、オーストラリア、ホノルル、フィリピンなどの米軍拠点とともに、陸軍や OSS にも送られていた。つまり、ホールも、延安レポートを詳細に読む立場にあった。

ディキシシー・ミッションの第一陣で延安に入ったジョン・サービスは、1944年9月8日に野坂と会見し、「日本共産党の計画」の延安レポートを書いている。野坂は第一段階に戦争の終結の国家再編として、戦争終結、軍事政権打倒、政府の民主化を挙げている。最後の民主化の中で特徴的なのは、「天皇制打倒」のようなスローガンを使わず、現在の天皇を退位させるけれども、当面天皇制を廃止せず、時期の到来を待ち、宣伝工作のなかで天皇の性格を議論すると慎重な見解を述べている。また野坂は連合国が天皇を利用することは危険だとの認識も示している（山本編 2006：91-92）。サービスは、野坂の見解を穏健な性格で興味深いとコメントしている（Service 1970：847）。

国防省の日本専門家であるエマーソンも、有吉とともに延安に入り、野坂と天皇制について意見を交換している。「日本の天皇に対する連合軍の政策」と題するエマーソン報告は、野坂がコミンテルンテーズで天皇制廃止を宣言されていることを承知のうえで、天皇を攻撃する声明を出すべきでなく、日本降伏時に現天皇を廃止することはないとしている。それは、日本人が皇室に持つ宗教的崇拝を考慮すべきで、天皇に対する方針決定に、国民感情を十分利用する必要があると、野坂の意見をまとめている（山本編 2006：174-175）。

野坂の民主主義革命路線は、ソ連の支持を得たイタリア共産党の路線から学んだという指摘がある。特に、イタリアの君主制問題について、イタリアの降伏時に、国王の処遇で現実的な路線を選択した。野坂は、イタリアの処理を日本の天皇制問題に応用し、天皇制廃止等のスローガンを退け、政治的民主化ののちに天皇存廃の問題は一般人民の投票で決するという方針を打ち出した。このほか、野坂は、教育の改革、独占資本・財閥の統制と国有化、土地改革を主張している（和田 1996：108、111-115）。

エマーソンは、野坂の理想的な民主主義への思考、政治路線の穏健性から、日本共産党を日本民主化のためにアメリカの協力者として活用する路線を構想させた（和田 1996：110-111）。

野坂がエマーソンに語った「日本共産党綱領」は、日本の共産党とコミンテルンの関係が、当初から緊密ではなく、日本の共産党は最初から非合法で、やむをえずかなり自主的な存在を続け、コミンテルンの解散は、モスクワとの結びつきでおびえていた党の反ファシズム闘争支持者を元気づけられていることに、エマーソンは感銘を受けている（和田 1996：109）。この部分で、前述したアップル・プロジェクトに関連すると思われる構想が語られている。つまり、日本共産党は相対的に少数で、十分強力な組織ではないが、日本が敗北に近づき、日本国内の共産党分子と共産党シンパは強くなり、敗北が確かになると軍事侵略に反対してきた共産党の威信は高まるであろう。そして戦争が進めば、日本にエージェントを送り、地下の共産主義組織と接触させ、国民の間に敗北主義的感情を起こし、連合軍上陸の援助を準備し、情報を送り返すことが可能となる、と指摘している（Emmerson 1970：1224）。

延安レポートの多くを有吉が執筆しており、この中で重要なのは野坂が分析する日本の動向分析とアメリカが作成した宣伝ビラへのアドバイスがあった¹⁰。有吉が書いたレポートには、日本共産党が持つ日本国内の情報網だけでなく、反戦のための宣伝ビラが、心理的に日本兵へ効果的に伝える具体的アドバイスなどを報告していた。たとえば宣伝ビラの表現方法、宣伝文句の語彙、個別評価や、日本人捕虜の教育と八路軍の実践例を報告する実務面の報告書が多いが、それに加えて野坂が日本の軍国主義を封建遺制と捉えて、いかに戦後の日本を民主化に向けて改革するか展望など理論的な面も報告している。

ホールの残した戦時中の資料として、唯一、中国と日本の地図がある。これは筆者がミシガン大学滞在中、図書館司書に調査協力を依頼して、未整理資料から発見したものであるが、ホールの蔵書印が押してある樺太や日本の地図があった¹¹。その資料とともに、連合軍が蒋介石政権に援助物資を送るビルマルルートや、ソ連からの西北ルートに関係する場所の地図があり、ホールが OSS 時代に入手したのではないかと思われる。

フェアバンクが1942年に重慶へ赴任した時の任務は、アメリカ大使館に勤務し、国会図書館のための中国の出版物を収集する文官という名目で、実際はワシントン D.C. の OSS が利用するため日本の出版物を見つけてマイクロフィルムに撮って送ることであった（フェアバンク 1994：280）。そこでホールのような日本の専門家が中国 OSS に配属されたのも、対日戦略の一環であったと考えられる。ディキシー・ミッションが送付してきた延安レポートには、当時アメリカ軍が必要とした日本国内の情報が重慶よりも豊富にあった。その主要なものは、野坂参三へのインタビューにより作成されていたが、例えば延安レポート7号「日本における心理戦争の標的に関する概略的分析」では、日本の出版物、日本語ニュース、華北の八路軍に捕らえられた日本人捕虜への入念な質問、1943年春に東京を離れた日本共産党員からの情報で書かれている。そこには、労働者、小作農、中学生

と大学生、軽工業並びにその取引に関する大企業の関心、兵士の家族、傷病兵と個別の状況を記述した後に、すべてのグループに共通する要求として、日本国内の世相を具体的に記述している（山本編 2006：74-82）。また、野坂参三が日本共産党を代表して中国共産党第7回全国大会に出席した時の報告書（延安レポート第71号「民主的日本の建設」）も、日本国内の厭戦気分と反抗運動、日本共産党の活動とともに、民主的日本の建設として、戦後処理と封建的・反民主的制度の一掃、民主政治の実現、天皇と天皇制、教育改革など、戦後改革の展望を示している（山本編 2006：819-853）。

おわりに

外交官として戦前に日本に赴任したことのあるジョン・エマーソンは、真珠湾攻撃の後、南米の日系人対策のためにペルーへ派遣され、つづけて中国・ビルマ・インド戦線に送られ、ディキシー・ミッションで延安に派遣されている。その派遣先は、ロバート・ホールの足跡とかなり類似しているが、ホールがOSSで仕事をしていたため、エマーソンの回想にはホールの名前が出てこない。

フェアバンクも、重慶に派遣された任務は、日本の資料を得ることなので、ホールが中国OSSに滞在した目的も、日本の情報収集であったことは推測できる。エマーソンが延安で野坂参三と会った時、野坂の書齋には日本の書籍、新聞、雑誌でいっぱい、発行から2ヵ月もたっていない新聞もあり、アメリカが求める日本の国内情報が山積していた（エマーソン 1979：154）。さらに野坂がアメリカの視察団に説明した日本共産党の綱領は、アメリカの権利章典を敷衍したような内容で、日本への心理作戦のみならず、敗戦後の戦後改革も、なかり具体的な展望を持っていたことに関心を示している（エマーソン 1979：163-165）。

ロバート・ホールも読んでいた延安レポートは、こうした野坂参三が持っている日本情報をいかに心理作戦に利用できるかという実際的な側面だけでなく、戦後の対日戦略を立案する上でも参考になっている。ロバート・ホールは、戦後ミシガン大学に復帰した後、ミシガン大学で日本研究センターを創設するために奔走するが、その時の研究テーマが日本共産党と労働組合を挙げていた。こうしたテーマをあげたのは、日本の占領政策と密接な関係があるかと思っていたが、終戦直後の時期からこうした研究テーマを掲げるのは、戦後日本の労働運動の動きから見ると、すこし早すぎるので、延安レポートを通じた日本共産党への関心が、戦後の日本研究の構想になったのではないかと推測する。

OSS 調査分析部（R&A）は、1943年春以降、ドイツや日本の戦後民主化を構想してアメリカの世界戦略を確実にするため、亡命ユダヤ人、ドイツ人、日系アメリカ人が加わり、初代ヨーロッパ・アフリカ課長でドイツ研究者だったウォルター・ドーンのイニシアティブで、フランクフルト学派の社会学者・人文科学者が集められた。ノイマン、マルクーゼ、キルヒハイマーは、OSSで戦後ドイツ構想立案の中核となった（加藤 2005：69-70）。

日本の戦後構想にも、野坂参三の構想がディキシー・ミッションを通じてアメリカの情報機関に伝えられ、一定の共感を持って受け入れられたことは、占領軍の民主化計画に一定の影響を持ったといえる。

ロバート・ホールの政治力は、戦後、マッカーサーの特別顧問に就任していたことから、非常に強力だったことが分かる。OSSは、社会主義者・共産主義者を進んで戦時中に登用して、マルクス主義を用いて自由に分析させたことが、アメリカ学知の総力戦であり、地域研究（Area Studies）はOSS調査分析部の出発点であった（加藤 2005:72）。ロバート・ホールは、戦後すぐに全米地域研究の学会長に就任し、中枢部との太いパイプをもっていたためか、1950年代、アメリカではマッカーシズムの批判にも、まったく影響がなかった。ロバート・ホールは、マルクス主義的な影響を公然と語ることはなかったが、ブラックボックスとなった戦時中の経歴を解き明かすと、歴史的文脈からは、その影響があったことが窺える。

註

- 1 2014年9月から2015年4月まで、筆者はトヨタ招聘教授としてミシガン大学日本研究センターに滞在した。その間、桜美林大学では特別研修をいただいた。ミシガン大学滞在中は、2学期間に1コマの授業を担当し、2014年秋学期は“Critical Anthropology in Contemporary Japan : Tsunami disaster calamity, Fukushima Nuclear Accident and radiation waste in Taiwan”、2015年春学期は“Politics and Anthropology in Imperial and Occupied Japan: dilemma between colonialism and academism”の授業を行った。また、noon lectureで“Roots of Japanese Studies in USA : anthropology, war and Michigan CJS”を発表した。本稿は、この時の発表原稿を元に執筆している。
- 2 To Mr. Vinacke From Clyde Kluckhohn, Subject : Annex on Treatment of Japanese Emperor”, Nov.19,1944, アメリカ国立公文書館所蔵、RG208, Box443。クラックホーンについては、占領中の世論調査所の活動を聞くため、2003年8月、および2004年2月、Ishino Iwaoにインタビューした時、OWIで知り合ったクラックホーンの推薦で、戦後ハーバード大学の大学院で人類学を専攻したという話から関心を持っていた人類学者である。
- 3 その時のデータをまとめたものが、*Governing Man* である（Leighton 1968）。
- 4 “The Michigan Alumnus 573”, [http://um2017.org/faculty-history/faculty/robert-b-hall/authority-japan-conducted-field-trips-island%E2%80%A8Robert B. Hall](http://um2017.org/faculty-history/faculty/robert-b-hall/authority-japan-conducted-field-trips-island%E2%80%A8Robert%20B.%20Hall), 2016年9月10日アクセス。
- 5 “Biographical Information : Robert Burnett Hall”, The University of Michigan News Service, Sept.1964
- 6 前述したハリス・スミスのOSSの研究では、ホールの所在を昆明と書いているが、この資料では重慶とある。アメリカの中華民国を支援する拠点が昆明であり、中華民国政府の臨時首都が重慶なので、ホールが両都市を往復していたのか、あるいは昆明管轄区の中の重慶支局にいたのかは不明である。ここでは、原資料のままに記載しておく。
- 7 山本武利の『ブラック・プロパガンダ』には、この二つの手紙を引用している（山本 2002 : 257）。（註32）Calling and Stelle, to Col Hall Only, 1944.8.22. RG226 Entry 148 Box7 Folder 103。（註33）。Colonel Robert B Hall. To David G Barrett for Captains Calling and Stelle 1944.8.24 RG 226 Entry 148 Box7 Folder 103。
- 8 コージ有吉は、アメリカ共産党に参加した前歴もあった（山本編 2006 : 10）。ビルマで有吉と出会ったエマーソンは、彼がハワイで店員、コーヒー園監督、トラック運転手、道路建設労働者、

- 沖仲仕、貨物取扱人という職業を転々とし、穏やかな話し方をするまじめな男で、アメリカの労働運動にかかわっていて、日本に行ったことはないが、日本語を流暢に話す二世チームのリーダーだったと記している（エマーソン 1979：123）。
- 9 この時有吉が収容されたのはカリフォルニア東北部のマンザナー収容所だった。その日本語新聞を編集していたジェームズ・小田は、後に野坂参三を告発する著作を出している。有吉がその収容所で出稼ぎ労働者の代表となり、当局と協力して、日系人が働きに出る地元の農家が支払う平均的賃金の支払いを監視する役割をしていたという（ジェームズ・小田 132-133）。
- 10 サンフランシスコの OWI 日本部長のジョン・フィールズは、1945年7月23日付けでアメリカの日本向け日本語放送に対する野坂のコメントに感謝状を出していた（和田 1996：111）。
- 11 ミシガン大学の資料について、次の文献参照（中生 2016）。

<参考文献>

Barrett, David D.

1970, *Dixie Mission : the United States Army observer group in Yen-an*, 1944, University of California

ベイトソン、キャサリン著、佐藤良明・保坂嘉恵美訳

1993 『娘の目から：マーガレット・ミードとグレゴリー・ベイトソンの私的メモワール』東京：国文社（Mary Catherine Bateson, *With a daughter's eye : a memoir of Margaret Mead and Gregory Bateson*, Perennial, 2001）

Beardsley, R, Hall, J and Ward, R

1959, *Village Japan*, The University of Chicago Press

ベネディクト、ルース著、福井七子訳

1997 『日本人の行動パターン』（Japanese behavior patterns）東京：日本放送出版協会

Deane, Huges

1978, “Koji Ariyoshi: In Memoriam”, Deane, Huges ed. *Remembering Koji Ariyoshi: An American GI in Yen-an*, Los Angeles: US-China Peoples Friendship Association

Embree, John F

1969, *Acculturation among the Japanese of Kona, Hawaii* (Memoirs of the American Anthropological Association, no. 59) Kraus Reprint

ジョン・エマーソン著；宮地健次郎訳

1979 『嵐のなかの外交官：ジョン・エマーソン回想録』東京：朝日新聞社（Emmerson, John K.,

1978, *The Japanese thread : a life in the U.S. Foreign Service*, Holt, Rinehart and Winston）

Emmerson, John K.

1970(1745), “Paper entitled The Japanese Communist Party by John K. Emmerson of U.S. Embassy, Chungking”, in *The Amerasia Papers*, Vol. II, Washington, 1970, 1218-1225

フェアバンク、J.K. 著、蒲地典子、平野健一郎共訳

1994 『中国回想録』東京：みすず書房（John King Fairbank, 1982, *Chinabound : a fifty-year memoir*, Harper & Row）

ジェームス・小田

1995 『スパイ野坂参三追跡：日系アメリカ人の戦後史』東京：彩流社

Grossman, Joel B

1997, “The Japanese American Cases and the Vagaries of Constitutional Adjudication in Wartime: An Institutional Perspective”, *University of Hawaii law review*, 19,649-695

加藤哲郎

2005 『象徴天皇制の起源：アメリカの心理戦「日本計画」』東京：平凡社

クラックホーン、クライド著、光延明洋訳
1971『人間のための鏡』東京：サイマル出版会、(Kluckhohn C., 1949, *Mirror for man : anthropology and modern life*, McGraw-Hill)
Kluckhohn C. and Leighton, D.
1974(1946), *The Navaho*, Harvard University Press
Leighton, Alexander, H.
1946, "That Day at Hiroshima", *The Atlantic*, October 1946, 85-90
1968(1945), *The Governing of Men : General Principles and Recommendations Based on Experience at a Japanese Relocation Camp*, Princeton : Princeton University Press
Leighton, Alexander H. and Leighton, Dorothea C.
1945, *The Navaho Door : an introduction to Navaho life*, Harvard University Press,
中生勝美
2006「日本占領期の社会調査と人類学の再編：民族学から文化人類学へ」末廣昭編『帝国の学知』第6巻、岩波書店、144-178
2007, "Shared Abodes, Disparate Visions: Japanese Anthropology during the Allied Occupation", *Social Science Japan Journal*, published on line on November7, 2007, pp.176-196
2014「アメリカにおける戦前の日本研究：ミシガン大学の陸軍日本語学校と日本地域研究」『社会情報研究』11号、21-33
2016a『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』東京：風響社
2016b「ミシガン大学の歴史図書館：所蔵資料と利用の現状」広島大学文書館編『個人文書の蒐集・整理・公開に関する諸課題（第1回広島大学文書館研究会記録集）』広島大学文書館研究叢書2、17-32
Service, John S.
1970(1944), "Report No.24 entitled The Program of the Japanese Communist Party from John S. Service, US Army Observer Section, to Commanding General, U.S. Armed Forces, China-Burma-India theater, with attached notes of conversation with Okano Susumu" in *The Amerasia Papers*, Vol I, Washington, 1970, 846-851
Smith, R. Harris
1972, *OSS : the secret history of America's first central intelligence agency*, University of California Press
山極晃
2005『米戦時情報局の『延安報告』と日本人民解放連盟』東京：大月書店
山極晃, 中村政則編；岡田良之助訳
1990『天皇制（資料日本占領, 1）』東京：大月書店
余茂春
1999『美国間諜在中国』香港：明鏡出版社 (Yu Maochun, *OSS in China : Prelude to Cold War*, New Haven and London, Yale University Press, 1996)
山本武利
2002『ブラック・プロパガンダ：謀略のラジオ』東京：岩波書店
山本武利編訳；高杉忠明訳
2006『延安リポート：アメリカ戦時情報局の対日軍事工作』東京：岩波書店
和田春樹
1996『歴史としての野坂参三』東京：平凡社